

# 交流の歴史に触れて

副団長 藤川 明美

## 国際交流への関わり

私は平成 27 年 4 月に国際交流を所管している都市魅力創造発信課に配属となり、姉妹友好都市の国際交流に携わるようになった。それまで、尼崎市とアウクスブルク市が姉妹都市として交流していることは知っていたが、恥ずかしながら交流の内容までは知らなかった。配属後に過去の資料を見るうちに、両市の交流が言葉や文化の違いを超えて長年に渡り今もなお続いていること、文化・スポーツ・経済・教育など様々な分野において市民の方々の相互交流があったことが分かった。そして、その歴史はこれまで両市の交流に関わった方々の熱意と努力によって積み重ねられたものであることに非常に感心し、国際交流の仕事に携わることは非常に光栄なことだと感じたのであった。

そして、その年の 8 月にアウクスブルク市から青年使節団の受入を行った。市内の視察先を案内し、夜は団長、副団長と食事を共にし交流を図った。わずか 10 日間ほどの尼崎での滞在であったが、尼崎市のホストファミリーの方々のご協力もあり、団員たちには尼崎ならではの様々な経験をしてもらうことができた。その交流の中で、アウクスブルク市の街や生活の様子などを聞いたり、送別会で披露されたアウクスブルク市紹介のビデオを見るうちに、私も現地に行ってみたいという思いが段々湧いてきていた。

そんな中、今年に入り、上司から尼崎市

から派遣する青年使節団の副団長としてアウクスブルク市へ行ってみたいかとの声を掛けて頂いた。団員たちをうまくまとめることができるのか、家族は大丈夫なのかなどいろんな不安はあったが、交流を繋ぐ一助になればと考え副団長を引き受けることにした。



歴史あるアウクスブルク市の街並み

## アウクスブルク市での再会

アウクスブルク市に到着し、空港に迎えに来てくれていたのが、昨年尼崎市にいられた青年使節団団長のシュタムさんと副団長のゼムリンガーさん、そして通訳の原さんであった。長いフライトで疲れていたが、懐かしい方々に会い、共に再会を喜んだ。知っている方がいるという安心感はなんとも言えず、これから過ごすアウクスブルク市での生活が楽しみになった。

その後、軽い食事をとりホストファミリーが待つ会場へ向かった。到着すると、昨年尼崎に来た団員たちがホストファミリーとして来られていた。アウクスブルク市では青年使節団員になる条件として、翌年ホ

ストファミリーを引き受けることが挙げられており、今回は夏休みのバカンスの関係で受入ができない1家庭を除き、9家庭に受入をしていただいた。

また、受入だけでなく各日程の視察先にも、何人かが同行してくれた。社会人の団員も仕事が休みの日に参加するなど、自分たちのできる範囲で我々をもてなしてくれていた。アウクスブルク市の団員たちも尼崎市からの我々と再び交流することを楽しんでくれているようであった。



ホストファミリーを引き受けてくれたアウクスブルク市の団員たち

「交流」とはお互いを行き来することである。尼崎市のことを知っているホストファミリーのところで滞在できることは、共通の話題もでき、団員たちも引率する我々にとっても非常に心強く安心であった。日本では住宅事情のこともあり、すべての団員の家庭で受入をすることは難しいが、日中の視察に同行したり、知り合いの団員がホストファミリーになっていれば一緒に食事をするなど、自分達ができる範囲での交流はもっと広げることができるのではないかと。派遣された団員たちが、ホストファミリーと再会できる機会があれば最高だが、ホストファミリーでなくても、アウクスブ

ルク市に関わる方々と再び交流することで再会の喜びを感じ、今後の国際交流への意欲に繋げてほしいと思う。

## 視察先について

滞在するにあたり事前に視察先の希望をアウクスブルク市には伝えており、今回は概ね各団員の希望が叶えられていた。個別にスケジュールを組んでくれたりともまめに対応してくれとても感謝している。

サッカースタジアム、フッゲライ、ダッハウ強制収容所、図書館、アウクスブルク大学、日本庭園など本当に盛りだくさんであった。今年はこれまでのプログラムにはなかったドイツの民族衣装を着る体験も盛り込んでくれていた。それは、昨年、アウクスブルク市の団員達が市立尼崎高等学校で浴衣を着る機会があり、それがとても良い思い出になったようで、副団長であり今回の派遣団の担当者であるゼムリンガーさんがプログラムに入れてくれていた。ドイツではほとんどの方が民族衣装を持っており、ホストファミリーの家庭から衣装を集め用意してくれていた。



ドイツの民族衣装を着て

毎日のプログラムはアウクスブルク市の歴史や文化、行政の取り組みについて理解を深めることができる内容であり、とても充実した日々を過ごすことができた。

それぞれの視察先の様子は、団員たちの報告にも書かれてあるのでここでは省かせていただくが、私が感慨深かったのはディーゼル記念石庭苑と日本庭園である。



ディーゼル記念石庭苑

ディーゼル記念石庭苑はヤンマーディーゼルの創業者である山岡孫吉氏がディーゼルエンジンの発明者であるルドルフ・ディーゼル博士の功績を讃え、ディーゼル博士の没後 100 年である 1957 年に石庭苑を寄贈したものである。2 トンを超えるモニュメントをはじめ、石組、植栽など一切が日本からアウクスブルク市に運ばれ、日本からの庭師、植木職人たちが築造したものである。

また、植物園内にある日本庭園は 1985 年にアウクスブルク市誕生 2000 年を迎えるにあたり尼崎市から寄贈したものである。造園家荒木芳邦氏の設計指導のもと尼崎市から造園職の職員を始め造園協会の方々が実際にアウクスブルク市に滞在し、多くの苦労の中造られたものである。

ディーゼル記念石庭苑と日本庭園は、実

際に現地を訪れると想像していた以上に広く立派で、当時、造園に携わられた方々の壮大な仕事に頭の下がる思いであった。造園協会の方々は築造後も何度かアウクスブルク市を訪れ技術指導をされている。そのことにより、日本の技術指導が引き継がれ、石庭苑と日本庭園は今もなお美しく管理されており、今やアウクスブルク市民の憩いの場所となっている。



日本庭園

## 派遣メンバーについて

今年度、尼崎市青年使節団の団員に選ばれたのは、社会人 1 名、大学生 7 名の合計 8 名であった。海外に行くのが初めての者も、留学経験のある者もいる、どんな雰囲気のかと少し不安はあったが、10 回の事前研修でコミュニケーションを重ね、とても良い雰囲気の派遣団になることができた。それには個々の団員が持つ素直さや明るさ、そして、コミュニケーション能力の高さもあるが、何よりも皆がこの派遣の目的や趣旨をしっかりと理解して取り組んでいたからである。それは、事前研修への取り組み姿勢や派遣中の行動にも現れていた。学ぶ時は学び、楽しむ時は楽しむというオンオフの切り替えができた団員たちであり、引率者として安心して過ごす

ことができた。送別会での出し物の準備や当日の披露、そして、団員たちが企画した団長の誕生日のお祝いの時などは、そのチームワークの良さを見事に発揮してくれた。

団員たちには事前研修や滞在中に芽生えた団員同士の信頼関係や友情をこれからも育み、お互いに高めあえる存在になって欲しいと思う。

団員たちは今回の派遣で、言葉や習慣などの違いを超えて、互いの理解を深めることの素晴らしさを身を持って感じ、また、アウクスブルクで受けたおもてなしに感激している。「もう一度、必ずアウクスブルクへ行きたい。」「もっと英語やドイツ語を勉強して、もっとコミュニケーションしたい。」「次は自分がホストファミリーになって受入をしたい。」「次にアウクスブルク市から青年使節団が来るときは市内を案内したい。」など言ってくれており、自分ができる範囲で国際交流に関わっていこうきたいとの思いが湧いてきたようである。それらの思いは是非、実現してもらいたいし、そのサポートができるように、私も団員たちとこれからも交流を続けていきたいと思う。



送別会で 100 周年 T シャツを着て、尼崎市の紹介をする団員たち

## おわりに

10 日間のアウクスブルク市への派遣を大きなトラブルや病気などなく無事に終えることができ、大きな安堵感を感じている。滞在中は尼崎市からの青年使節団として様々なところでとても温かく受入をしていただいた。実際にアウクスブルク市へ行き、様々なところで両市の絆の深さを実感することができた。それは全てこれまでの両市の 57 年という長い交流の歴史のおかげである。

お別れの日、昨年の副団長であったゼムリンガーさんが「昨年、尼崎で受けたおもてなしをお返しできればと思い今回のプログラムを企画した。皆に満足してもらいとてもうれしい。」と言われて、その場にいた団員たちも引率した我々もその思いは非常によく理解できた。両市の青年使節団員として、それぞれの市で温かく迎えられた者は、皆どこかでそのお返しができると思っている。

今後もその思いを忘れずに自分で行うことは何かを考え、自分なりの国際交流を続けていくことが大切である。

最後に、今回の派遣でお世話になったホストファミリーを始め、アウクスブルク市関係者の皆様のご配慮により、毎日が新たな発見に満ちた貴重な日々を過ごすことができ、心から感謝申し上げたい。